

コンチクショウ！！ ぶつ
潰す！！

いちは

親友が、仮面ライダーに蹴り殺された。

社葬の帰り道。

私は、そのままスポーツジムへ行って、入会手続きを済ませた。

さらに、ボクシングジムに寄って入門した。

生まれつき、体は弱い方だった。

それでも、大人になつたら、いわゆる「ただの人」にはなりたくないという、そんな思いだけはずつと持っていた。

大学に入って誘われたサークルは怪しげで、

全学連とか全共闘とか、そういうものを包括したような、

リーダーがとにかく不気味な組織だった。

サークルは、さらに全国の他大学のサークルと連携していて、

年に二回は全国集会があって、とにかく結束力だけは強かった。

大学三年生の全国集会で、横浜の大学に通うヤスシと知り合った。

ヤスシは空手三段、剣道二段、そして何故か書道初段という、いかつい顔をした男だった。

私とヤスシは歳も同じで、下宿も比較的近かったことから、お互いの家を行き来して、夜遅くまで酒を飲んだ。

ヤスシの口癖は、「ぶっ潰す」。

何をぶっ潰すのか、それは分からぬ。

私の口癖は、「コンチクショウ」。

もちろん、何に対するコンチクショウかは分からぬ。

だけれども、私たちには、得体の知れないエネルギーがあった。

何者かになる、という志し。

何かを成し遂げる、という心意気。

上に立ちたい、という野望。

若くて、泥臭くて、どす黒い、そんな気持ちを、

時には鎮めるように、時には鼓舞するように、

私たち二人は安い焼酎を飲んだ。

ヤスシには恋人がいた。

東北出身のタミコという子で、雑種犬のような顔をしていた。

小柄な彼女は気がきく子で、ヤスシの下宿で三人で一緒に酒を飲む時には、

私たちは自分で酒を注ぐことは一回もなかつたし、後片付けもしなかつた。

タミコが全部やってくれたのだ。

ヤスシは、私といふ時には亭主関白といった感じで、タミコに対する態度も口も悪かった。

「お前、早く酒をつけ。ぶっ潰すぞ」

ヤスシは、よくそんな風に言つてゐた。

タミコはこんな扱いをされながらも、どうして一緒にいるのだと疑問に思つたものだつたが、ある夜、私が酔いつぶれて寝てしまい、ふと目が覚めた時、

ヤスシが優しい声でタミコに、「ありがとう」と言っているのを聞いて、妙に納得してしまった。

柔道も剣道も有段者である彼の優しい言葉には、
私なんかには及ばない力強く頬もし感感謝の響きがあった。
そのことに気づいた時、私は、
「コンチクショウ」
と呟いた。

大学を卒業して、私とヤスシは同じ会社に就職した。
ただ、勤務する支社が違っていたので、連絡を取り合うことは徐々に少なくなった。
そして、今年の三月。
ヤスシから、結婚する、という電話があった。
相手は、もちろん、タミコ。
タミコのお腹には、すでに新しい命が宿っているという。
私は、電話口に大声で、
「コンチクショウ」
と叫んだ。
嬉しさが度を超して言葉にならない時、人は言い慣れたセリフしか出ないのかもしれない。

先週のこと。
「もうすぐ俺にも子どもができるんだよなあ」
電話口で、ヤスシは言った。
ヤスシの声は、決して明るくなく、かといって沈んではおらず、
敢えて表現するなら、寂しそうだった。
理由は、すぐに分かった。
「この仕事、子どもがいたらやれないからな。週末での最後にするわ」
ヤスシは心底、今の仕事が好きだったのだ。
私は、ヤスシの全てを分かっているわけではなかったけれど、
タミコの次くらいには理解しているつもりだった。
「良いじゃないか。おめでとう、コンチクショウ」
私は、それだけ言った。

ヤスシが死んだと連絡があったのは、一昨日のことだ。
駆けつけた私が見たのは、ヤスシの遺体と、お腹の大きいタミコだった。
タミコは私を見るなり、ど汚い雑種犬の顔で大声を出して泣いた。
彼女の金切り声に近い泣き声は、私を現実から引き離してくれた。
私はヤスシの腫れあがった顔を見ながら、ただただひたすらに、
「コンチクショウ、コンチクショウ」
そう呟いていた。

社葬から帰る直前。
タミコに呼び止められた。

涙も流さず、気丈に、彼女は言った。

「ぶっ潰して」

私は、タミコの目を半ば睨むくらいの勢いで見つめながら、

「任せろ。コンチクショウ」

そう答えた。

二十キロのダンベルを持ち上げると、腕がつりそうになる。

「コンチクショウ」

私は叫びながら、腕を曲げる。

ボクシングのスパーで殴られても、

「コンチクショウ」

そう叫びながらヤスシの顔を思い出して、右手でも左手でも、動く方の拳を相手に叩きつけた。

スポーツジムやボクシングジムが終わると、私は家まで十キロを走って帰った。

「コンチクショウ、ぶっ潰す、コンチクショウ、ぶっ潰す」

そうリズムを取りながら。

家の近くに川原がある。

私は、そこで毎日、こう叫ぶのだった。

「コンチクショウ！！ ぶっ潰す！！」

そして、タミコの大きなお腹と、ヤスシの腫れた顔を思い出しながら、

さらに大きな声で誓うのだった。

「コンチクショウ！！ 僕がお前をぶっ潰す！！」

来週末、私たちの支社で幼稚園を襲う。

私はそこで、ヤスシの仇を討つ。